

---

# Arrange Line

水深無限風呂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A r r a n g e   L i n e

### 【Nコード】

N 6 9 1 5 Z

### 【作者名】

水深無限風呂

### 【あらすじ】

その世界には魔法や魔物などは存在しない。そして、その代わりと言ってはなんだが“所持者が変態であればあるほど強力になるオリジン兵器”と、その所持者である《アレンジ》と呼ばれる脳姦趣味や眼姦趣味や死姦趣味などを持つ奇人、狂人、変態たちが平和に過ごしていた。エログロ要素（主にグロ）が強いと思います、精神的にキツイ展開も多いかと思います、人がバンバン死ぬかもしれません。

## 千里眼屋（前書き）

この作品に登場する人物、団体は全てフィクションだと思います。

## 千里眼屋

視線は空を漂っていた。

いや、正確には空を飛んでいた、鷹のように空を翔けていた。  
見下ろすその景色は森。濃霧に包まれてもその広大さが伺える森。  
その森は原始的な表情を浮かべはしているが、生氣は何処にも感じられない。

言うならば人工的な原生林だろう。

そして、その森の地面は厚い雪の衣を羽織っていた。

これもまた、人工的な顔色を浮かべていた。

総じて、どれも原始的な姿をしているがどれ一つとして自然ではない。

全てが人工的に“0に戻された”そんな森だった。

視線は空を進み、一人の少女を見つけた。

その肌は雪と同化しそうなほどに白く、また、その髪も同じであった。

ただ、その瞳は黄金色に爛々と輝いている。

視線が白い少女に近寄ろうとすると、それを遮るかのように足音が原生林へと響き渡った。

カシャツ、カシャツ、という甲冑独特の音。

白い少女はその音に薄っすらと反応の色を示す。

「……やっと見つけたぜ、カミサマ」

視線が白い少女の次に見つけたのは、対照的な色合いの黒い少女だった。

その肌は白い少女と同じほど白いが、その髪と瞳は雨水に濡れた鴉のように黒かった。

「アンタの力をくれ」

黒い少女は不敵な笑みを浮かべつつ、白い少女へと声を掛けた。

白い少女は小首を傾げながらも、その細い両腕を一生懸命に伸ばす。

助けを求めるように、受け止めるように。

《ここまで辿り着くとは、やはり人間の欲は底が知れない、そしてそれと同時に……興味も尽きない》

乱雑なノイズに飲み込まれた声。

黒い少女がその言葉に首を傾げるのも気にせず、白い少女は細かに口を動かして言葉を紡ぐ。

「何言ってるかさっぱりだぜ。でも、その姿勢はOKサインってことでいいんだよね？」

《あなたには、私のすべてを貸し出すだけの価値がある、意義がある》

白い少女は更に両腕を伸ばし、黒い少女の手を取る。

黒い少女はその動作に思わず顔をゆがめ、残虐的な、それでいて

自嘲的な笑みを浮かべる。

「全部ぶち壊したいんだ、自己快楽精神に浸りきった、猿の延長線上に存在する二足歩行の愚物の全てを」

憎しみをぶつける様に、自戒をするように黒い少女は呟く。

《本当にあなた達は面白い。同属殺しに共食いに強姦に狩猟……何でもする。時には同属なのにも関わらず犬のようにすら扱う》

白い少女の手から淡い青色の光が漏れ始める。

《だから私は本当にあなた達が好きだし、それ故に知りたい》

黒い少女は、白い少女に触れて初めて少女の言葉を正確に聞き取れた。

「好きにしていーいぜ、カミサマ」

ニツと笑う黒い少女。

その直後、黒い少女は淡い青色の光に埋もれ。

「どうせ、58億分の1の命だからな」

視線は、一気に引き戻される。

急激に意識は覚醒した。そう、まるで急にスイッチをオンにされた玩具のように。

現状把握。ボクは今、何処で何をしている？

そう思っただけを見回せば、大した加工もされておらずに『とりあえず板とかにしといた』と言わんばかりの手抜き具合が垣間見える素材で出来上がった壁、天井、床。……それと『とりあえず座れば椅子つしょ？ 椅子よりちよつと高ければテーブルつしょ？』みたいな手抜き具合が垣間見える椅子とテーブル。

そんな手抜き具合しか見えない場所で、ボクはテーブルを挟んで少女に顔をじいつと覗き込まれていた。

……えつと……？

「……見えたか？」

ふと、ボクの顔を覗き込む少女がお前の戸惑いなど知るものか、と言わんばかりに話しかけてくる。

その少女は顔の造形や鼻の形、口の形からしてとても美しい顔をした少女だということが伺える。

……ただ、その目を覆う乱雑に白い目が無数に描かれた黒帯がなんと不気味で、全部台無しにしている感がある。

なんとも残念だ。

「……まあ、はい」

しかし、残念がついて無視するわけにはいけないので、一応適当に答えておく。

実際に何かは見えた気はするが、何が見えたかは分からないが。だからといって嘘を吐くのも……なんだかナァ、といった感じだし。

「なんと！ 見えたのか……！ これもさばきがみ様の賜物じゃ……、ああ、ありがたや……ありがたや……」

両手を丁寧に合わせてみたり、天を仰いでみたり……など相当なオーバーアクションを取りつつ嬉々たる様子で身振り手振りする少女。

しかし、ボクからしてみれば「さばきがみ様」って何ぞや？ といった感じなので、この少女が何故そこまで喜んでるのか一切理解できない。

「……さばきがみ様……とは？」

自分で理解できないなら、他人に聞けばいいじゃない。……といった風の過去の人間が残した素晴らしい言葉に従って、ボクは目隠し少女の発した聞き慣れない言葉について問う。

すれば、少女は大きく目を見開き（目の部分は隠されて見えないので推測だが）、驚愕の色を隠しもせずに顔全体にこれでもかというほど“お前、そんなのも知らないのかよ？ 何なの？ 外人？”みたいな雰囲気を表す。

……目は口ほどにモノを言う、なんて聞いたことがあったけど……この少女の場合は目を見ずとも顔全体が口ほどにモノを言っている。……恐らくは嘘とか簡単に見破られる人種だろう。

「貴公……、さばきがみ様を知らんと言うか……！？」

「ええ、まあ……それとボクは貴公ではありません、女です」

若干トーンを下げて言う。……今のうちに言っておこう。ボクは女だ。

よって、貴『公』ではない。うん。

「あ、ああ……」



ボクの言葉に何か衝撃を受けたらしい少女は顔を真っ青にして震えだす。

……ボクが女だということがそこまでショックだったのか。おもいつきり傷ついた。多少とかじゃなくておもいつきり。でもまあ、ショックを受けられたとしても、ボクが女だということとが理解されたなら……、詫びの言葉が二、三個あればそれでいいか。

「なんと嘆かわしいことか！　このようなことが古今東西あっていいことか！？　いや、ならん！　待っている、今すぐ私がさばきが見様がお見えになるように説得してこよう！！　……ナニ？　お前程度にできるのかだと？　ナア二、この私にすべて任しておけ！　貴公はそこでバカみたいに口あけて突っ立ってるだけでいい！　ワハハハハハハ！」

だがしかし。

ボクの予想していた反応とは180度……というか、もはや違う路線の反応を身振り手振りの相変わらずダイナミックな仕草をしつつ、返してくる目隠し少女。

……聞いちゃいねえ……。

それとバカって言ったぞ、コイツ。……バカってお前……。

「いや、別にいいんですけど……って、もういないし……」

面倒ごとの二オイしかなかったたので断ろうと思ったが、それよりも早く先ほどの少女は尻尾のように結われている変わった形の装飾を揺らしながら奥へと行ってしまふ。

結われているテイルってか。……やかましいわ！

というより、何とも面倒な……。

……今のうちにばっくれてしまおうか？　とも考えたが、それは

それで人間としてどうかしていると思うので待つことにする。

というか、正確に真っ直ぐに走っていったことを考えると恐らくあの少女は眼が見えているのだろう。

……なんで見えるんだ……ああ、アレンジだからか……。

いや、ソレを思い出すのはやめよう。鬱になる。

……しかし、なんでこうなったんだかなあ……。

……まあ、理由は一つしか思い当たらないけどさ。

「待たせたな貴公！」

そしてその理由を思い出す暇すらなく先ほどの少女は戻ってきた。速いっ！？ 赤くないのにボクの親友の三倍は速いぞ、こいつっ

……。

……ボクの親友がのんびりしてるだけですか、そうですか。

「待ってないです、それと貴公じゃないです。ボクは女です」

再び貴公と呼ばれたのに思わずムツとし、トゲのある言葉で返してしまう。

「そう隠さずともいいのだぞ、貴公！ 安心しろ、貴公が今にも嬉々あまりに踊りだしそうなのは分かっておる！」

ノーダメージどころか無効化された。そして再び貴公と呼ばれてボクのみがダメージを受けた。

……理不尽だ。

「アンタ、人の話聞かないクチですね？」

「サアサ！ 入った入った！」

「聞けよッ！！」

ボクの悲痛な叫びも空しく、目隠し少女はボクの背中をグイグイと押し込んでいく。

……目は見えてるのに耳は聞こえてなかったのか……。普通逆じゃないか？ ……ああ、アレنجだからそれでいいのか……。

といった感じに、内心諦めたボクは目隠し少女のされるがままになり、先ほどまでいた手を抜かれた場所しか見当たらない部屋から奥へと進んで、そこ等の部屋と大して変わりない……が、多少……大体1・5倍ほど他の部屋より大きい部屋に数十秒ほどで辿り着く……ふむ、どうやら外見通りの広さのようだ。どうにも“さばきがみ様”は空間を操ったりできる人ではないようだ。一安心。

ヒンシュクを買って雪原のと真ん中にも飛ばされたらどうしようかと肝を冷やしたが、杞憂で済みそうだ。

……そして、ここが本当に“さばきがみ様”とやらの部屋なのだろうか。そうなのだとしたら教祖のワリには随分と質素な部屋だ、………どうにも成金主義ではないらしい。………いやまあ、別に教祖“成金詐欺”っていう偏見があるワケじゃないけどサ。

まあ、少しだけ好感が持てる。………まだ顔も見えてないが。

「さばきがみ様！ 件の男をお連れしましたぞ！」

「あのお、すみません、ボク女なんですけ」

「この屈強な男！ 丸太のように太い腕！ 厚い胸板！！ 何とも素晴らしい男だと思いませんか！？」

「聞こえてないだけじゃなくて見えてすらいなかったのか……」

ボクの腕細いし、胸は薄い。

もう一度言えば、ボクの腕は細いし、胸も薄い。

そんな屈強な姿はしてない。

そしてやはり見えてなかったのか。更には聞こえてもない……。彼女はどうかやって真っ直ぐ走ったのだろうか？ そしてどうやっ

てこの部屋へと辿り着いたのだろうか……？

……ボクの背中にどうやって回れたのだろうか……。

アレか、霊的な力が働いているのか。そうに違いない、そうしか考えられない。

……いや、アレンジだからか……。アレンジって便利な言葉だね。この一言で快樂殺人者から政治家まで全てを表せる。うん、便利。

「……申し訳ありません、どうにも私の部下が御迷惑を掛けたよう  
で……」

呆れたのと、目の前に姿を現した不思議な少女について考え耽っていたせいで、何も言えなくなっていたボクに“さばきがみ様”……らしき黒髪の長髪に、解けた金属のようなオレンジ色の瞳をした少女が詫びを入れてくる。

おい、教祖様に頭下げさせてるぞ、目隠し少女よ。それでいいのか、目隠し少女よ。

というか可愛いな、教祖様……。こんな移住民族を牛耳ってる宗教の教祖ならもっと威厳のありそうなお爺さんだとか、ボロボロになった聖女サマだとかそんなだと思っただけ……。

普通の町娘つばいぞ。そして短めのスカートから除く生足が艶かしいぞ、肌をそんなに出していいのか教祖様よ。

「サアテ、貴公！ その目に焼き付けるがよい！ これがさばきがみ様のお姿だ！ 麗しいだろう！ 可愛らしいだろう！？ この方の百本の腕は百人の罪人を同時に裁き！ 百の瞳は百人の人間の罪を見抜くのだ！」

急に大きな声がして驚いて、何事かと思って振り向けば、目隠し少女が壁に向かって演説をしていた。……相変わらぬ身振り手振りを加えて。

……しかもそのアクションには先程までより随分と熱がこもっており、魂の演説だということを体現している。

ヤバいのではないだろうか、あの少女。……何がヤバいつて聞かれれば……。ほら……。そりゃ、主に脳とか。脳とか、脳とか……。

「……まあ、その脳足りんは少し放っておいて。……私も待ち人が来るまでは暇ですし、折角ですから少し……お話しませんか？」

呆れを通り越して一種の感心を覚え始めたボクへと“さばきがみ様”が遠慮がちに声を掛けてくる。

どうにも彼女は脳に異常があるのではなく、脳が足りてないらしい……。

結構酷い言葉だ。

「脳足りんって……結構酷いですね」

思わず胸の内にしまっておこうと思っていた言葉を発してしまう。

……ちなみに脳足りんとは、考えが足りないこと、知慮が浅いこと、脳が足りないこと。阿呆……の意味……。だったと思う。

あと、ボクは“馬鹿”の数十倍以上相手の頭を自分の下に見る言葉……。だと自己解釈をしている。

「いいんですよ、その子、聞いてませんし見てませんから」

ボクの言葉に対する“さばきがみ様”の心底ウンザリするかのような声。

……なるほど。妙に納得できる。

でもそれは極端に言えば、弾丸が通らないのなら人に銃を向けていいと言っているようなものなんじゃないのだろうか。

それでいいのか、さばきがみ様。何か間違っていないか、さばきが

み様。

「さて……、まずは無難に自己紹介でもしましょうか。私の名前は逆坂美羽<sup>さかさか みう</sup>……、であると同時に、この裁忌蛇教<sup>さいぎだ</sup>の教祖であり、唯一神である“さばきがみ”でもあります。どうぞ、よろしく。……あ、ちなみに裁忌蛇とは『裁かれるべくは忌々しい蛇』と書きます。ここでの『忌々しい蛇』とは他の生命を丸呑みにする強欲にして貪欲な蛇の如き罪人を示し、『裁く』とは私……つまり“さばきがみ”による生物に与えられた平等な罰の執行の即行を示しています」

儚い笑みを浮かべつつ、つらつらと自分に関する情報と要らない裁忌蛇教の情報を述べていく“さばきがみ様”……サカザ力さん。自分のこと神って言っちゃったよ、この人。……ああ、この人もアレンジなのか。

……しかも前半はまだ理解できるけど、後半は遠まわしに……というかワリとダイレクトに『殺す』って明言してるじゃないか。

恐ろしい団体だ。まあ……血の気が多くて狂人しかないアレンジのことだし……ワリと普通なのだろうか。

……ちなみに今日その血の気が多くて狂人しかないアレンジにボクもなる……ということは思い出すと泣きたくなるので思い出さないことにする。……思い出したけど……。

「サカザ力……ミウ……、南<sup>サウス</sup>の方の出身なのですか？」

内心はグチャグチャでもう何もかもがイヤになってきたが、それを振り払って平常を装いつつ、それなりな返答をする。

「あら、お分かりになりますか？」

意外そうな表情を浮かべながら疑問系に疑問系で返してくるサカ

ザ力さん。

……疑問系を疑問系で返すのはどうかと思うぞ、サ力ザ力さん。  
生まれは意外と庶民なのか、サ力ザ力さん。

「ええ、まあ……。名前が二つに分かれてる人は大体南サースレミアの方の人ですからね。……それにほら、聖職者の方は大体が南サースレミアの方の生まれじゃないですか」

……“サースレミア”。東西南北に位置する四大大国が一国。通称『聖職者のサースレミア』……。または『善人気取りの国』……。……あるいは『右にならえ大国』。

その通称が示すように、様々な宗教家達が集って“全ての神すらをも司る神”と呼ばれる《プリミティブ・ドール原初の人形アレンジ》という神を主軸とすることで平和的な国作りを目指している国だ。

……この《プリミティブ・ドール原初の人形》と呼ばれる存在が現れる以前は宗教家同士の内戦が絶えずに、血みどろ大国なんても呼ばれていたけど、今ではその面影もない。

しかし、今でこそ国の安定化は成功こそしているものの、今では無宗教家が増え始め、国の将来は灰色らしい。

何とも安定しない国である。

……まあ、国が不安定になったときに破滅を人は予感し、再び信仰心を取り戻すだろうから……。滅びそうになったらまた以前みたいな宗教家だらけの国に戻るのだろう。

原始的なモノほど繰り返し返すってのはこのコトかな。……まあ、幼稚プリミティブ・ドールな人形なんていうものを信仰してるくらいだし。そんなものだろう。

「うふふ、それもそうですね」

なんて風にいろいろ考えるボクのことなど知ったことかと言わん

ばかりに、目を細めて笑いつつ、肯定するさばきがみ様……こと、サカザカさん。

おお、中々に様になっている。

……神々しいっていうよりは艶かしい感じだけど。

「で、あなたのお名前は？」

そこでサカザカさんは話の路線を九十度に変えてくる。

無論応えることにする。というか名前を聞かれて応えないのは人殺しだけ、というボクのジंकウスが存在するので、やはり応える。

「ああ、ボクですか。ボクはハヤトっていいいます」

「ハヤト……、中々に可愛らしいお名前ですわね」

「……そうですか？　ボクは男っぽくてあまり好きではないんですが……」

「名前だけなら確かに男性のようですが、……あなたのその可愛らしい外見と合わされば可愛らしい名前に聞こえます」

またもや目を細めつつサカザカさんは楽しそうに喋る。

……それにしても、初めてだ。

ボクの名前を『可愛らしい』なんて言った人は……。

思わず好きになってしま……ハッ！？　まさかこれが洗脳力か！　こうやって教団を広げていくのか。なるほど……。

……騙されんぞ。ボクのジंकウスの一つにこういうのがあるんだ。

『《愛している》という言葉と《自分を褒め称える人間》に深い信頼を抱くな』ってね。

間違っではないだろう。たぶん。

「まあ、そう言ってもらえると嬉しいですね」



なので、そのジnkスに従って素っ気無い返事を返す。  
……うむ、我ながら完璧だ。

「あら、中々にドライな反応……」

残念がるような、それでいて予測していたような得意げな表情を  
浮かべるサカザ力さん。

……む、これは大してダメージを与えていないな、追撃するしかない。

「男っばいでしょ？」

「そんなことありませんよ」

即答か、中々に出来る人だ。

まあ、どうでもいいワケだが……。

「さて、そういえば……あなた、見えたらしいですね」

「あ、はい。まあ……」

次はどんな追撃を掛けようかと考えていたところ、サカザ力さんは妨げるかのように話題を変えてきた。

クッ……やりおるわ。

ちなみに先ほどから言われる『見えた』とは何かと言えば、この  
施設……裁忌蛇教の信者のみで構成された移住民族の『千里眼屋』  
アレنج  
キライバ  
せんりがんや

という施設では、“千里眼”と呼ばれる能力持ちのアレنجが客に  
対して……こう、なんかして……こう、何か見える人は見えるらしい。  
……アレنجのことだからよく分からない。もしかしたら脳を  
ハッキングされてたり……やめよう。怖くなってくる。

しかしまああ……何が見えるかは知らないし、ボク自身何が見え  
たかは分からないが……、こう、何か……記念に……。

わからないかい？　こう、なんか……、あると入りたくなるだろう？　なるよね？

そんな感じで、入ってみたらコレだよ。

……今度からはあまり怪しいところには入らないようにしよう。

「どんなモノが見えましたか？」

「どんなモノと言われても……ボク自身、よく覚えてないんですよ。でもまあ、見えましたよ。何かは」

何か、白い光景だった覚えはうつすらとある。

あと既視感デジャヴを多少感じた、何処かで見たとような光景だった気がする……ような、違うような……。

とりあえずそんな感じだった。

「……まあ、そんなものでしょう。……と、……そろそろ私の待ち人も戻ってくる頃でしょうし……。長居させてしまったことと、私の部下の無礼講をお許しください。短かったです、とても有意義な時間でした」

ボクの答えが気に入ったか、気に入らなかったのかは分からないが、急にサカザ力さんは遠まわしに『帰れ』と言ってきた。

……むう、中々に変わった人だ。

そしてついでに言わせてもらうと、ボクは終始立ちっぱなしだった。……まあ、こんなものか……。

もう少しサービスしてくれてもよかったんじゃないかと。せめて椅子ぐらいは……。

「そうですか……。では、こちらこそ長居してしまって……すみません」

「あ、待ってください……つまらないものですが、どうぞこれを」

内心不満を垂れ流しにしつつ、部屋を出ようとしたところで、サカザカさんはボクに“おまもり”のようなモノを手渡してきた。

「……これは？」

「我が裁忌蛇教のおまもりです。私の力がこもってますよ、たぶん」

……たぶんって……。

そんな曖昧な……、それとサカザカさんの力がこもってたらどうなるのだろうか……。

……まあ、おまもりなんて気休めにもならないほど効果の無いアクセサリーのようなものだし……。

何かを期待するだけ無駄か……。

「でも、何故？」

「それはアレですよ。ほら。……あなたは今から、遺跡に潜るのでしょうか？」

その言葉を聞いた途端。ボクの頭は釘がたくさん刺さった木の棒で叩かれたような衝撃を覚える。

あ、ああ……。そうだった……。それで現実逃避に千里眼屋せんりやんに入ってたんだ……。

「……それを思い出させないでくださいよお……」

「あら……この話題は不味かったですか？ でも大丈夫ですよ、遺跡は下手すれば死にますが、下手をしなければ死なないところですから」

何のフォーローにもなっていない……。

……ちなみに“遺跡に潜る”というのは、ボクの住む村……とい

うか、この世界の何処でも最年少で10歳……一番遅くても16歳の誕生日に行われてるであろう儀式だ。

どういう儀式かといえば、遺跡の最深部まで進み『何とも表せぬ存在』とか呼ばれてる『何か』から“オリジン”というものを授かって、先程から何度も口に行っている“アレンジ”になる……といったものだ。

ちなみに、オリジンが何だとかアレンジが何かと言えば変人と狂人と変態、そしてそれを覚醒させる道具だとしかしい用がないのだが、詳しく説明すると。

「ハヤトおー？」

聞こえただろうか、今のが件のアレンジの声である。

ボクはそのアレンジの姿を捉えるべく声のした方向……つまり、背後を確認する。

「ああ、やっぱりアキラか……」

「む、何その嫌そうな顔」

確認した背後には若干紫がかった黒髪をポニーテールにし、不満そうな表情を浮かべる少女がドアから部屋の中を覗いていた。

彼女の名前はアキラという。ボクとの関係は俗に言う幼馴染ってヤツだ。

また、小さい頃から“アキラ”と“ハヤト”という男っぽい名前という繋がりだけで仲良くしている仲でもある。

……ちなみにここでは最近アキラの上半身の腹部より上にあって肩から下にある、あの部分の女性的な憎いアレが成長してきて男っぽくなくなってきたコトについては何も言わない。

……妬ましい。あんな脂肪の塊……焼け落ちればいいのに。

「私はハヤトが心配だから見にきたって言うのに……」

だが、そんなボクの心境など知るものかと言わんばかりに、若干俯いて独り言気味にぶつぶつと愚痴り、更には上目で睨んでくるアキラ。……くう、我が幼馴染ながらなんて可愛さだ。もはや男っぽいのは名前だけじゃないか、チクシヨウめ。

「あー……ハイハイ、ごめんね、悪かったよ。……じゃあ、失礼します」

未だにジト目でボクを睨みつけながら“料理は教えてもしない”だとか“もう少し家事に意欲的になれ”だとか耳に痛いことを言い続けるアキラの背中を押して、苦笑いを浮かべるサカザ力さんから逃げるように“さばきがみ様”の部屋を出る。

……まあ……。

……ともかく、ボクは未だに壁に向かって熱演を続けている目隠し少女を傍目に“千里眼屋”を出た。

……そしてその際に、ふと気になったが、いつまで目隠し少女は演説し続けるのだろうか……。

いや、恐らくは世界の終わりまで演説し続けるのだろう……。アレンジだし……。

「……」

一人の少女が出て行った部屋で、美羽は黙りこくっていた。

そうなれば、総じて部屋は時計が決められたタイミングで刻む音だけが占めており、それは美羽の内にある焦燥を更に掻き立てる。

普段なら広く見える部屋も何故か狭く見え、自分を圧殺しようと

してるのではないか、という感覚を覚え。

更には自分は今何をやっているのか、こんなところで座っているのか、もつと時間を有効活用できるのではないか……、という感覚をも覚える。

「朱莉<sup>しゅり</sup>」

「で、あるからして……吾が輩の述べる脳髓論とは極めて痛快であり、今までのナントカノ法則だとかナントカノ定理だとかいう頭のオカタイことなどがユニークでユーモラスなジョークに聞こえて

お？ 何でございますか？」

美羽はいよいよその感覚に耐え切れなくなったのか、未だに壁に向かって演説を繰り返していた目隠し少女 朱莉へと声を掛ける。

「さっきの少女……本当に生身の人間ですか？」

悲願するような。

違うと言ってくれ、と頼み込むような美羽の声。

「少女……というところのどちらのコトでしょうか？ まな板娘か、礼儀知らずの娘か」

そんな美羽の声に対して、朱莉はとぼけるように答える。

「……まな板の方に決まっているでしょう」

朱莉のその態度が気に食わなかったのか、若干の嫌悪感を出しつつ声を少々荒げる美羽。

「ああ……そつちでしたか……。ええ、そうですとも。あの小娘は正真正銘のナマの人間でございます」

だが、そんな声にも揺れずに朱莉は先程までの様子とは打って変わって、朱莉は極めて平常な反応を美羽へと返す。

そこには先程までの異常な様子は何処にもなく、何処か策士のようない知的な雰囲気すら漂っている。

「では、何故……？ 何故、本当に“見えた”のですか？」

「ハテサテ、私は何分学の浅い身でしてな……一向に分かりませんなあ。……しかし、私が今日『千里眼』で覗いた光景とまったく同じモノを見ていたの考えると……恐らくは私と同じ“千里眼”形質を持っている……というワケでもないでしょうしなあ。……アア……馬鹿らしい話になりますが、もしかしたらアレかもしれないな。共感能力の形質でもあるのかもしれないせぬ」

淡々と述べる朱莉。

そして共感能力という言葉を発した朱莉は極めて冷静だったが、それに反比例するかのように美羽の表情は更に焦りのソレへと変わっていく。

「デタラメを言うんじゃないやありません！ 共感能力など……、そんな……空想上の能力……、存在するワケが……」

信じたくない一心からか、美羽は酷く声を荒げて反論を返す。

「フム、まあ。気持ちは分かりますぞ。相手に共感し、相手の心理を自分のことのように理解し、更には相手の特徴、弱点、その全てをも自分のことのように理解し、極めつけには相手の“能力”をも自分のことのように理解し、己がモノとする……そんな神に

も等しき存在を認めたくない…… というのでしょうか？ あなたが神という立場にいるが故に」

「……っ」

そんな美羽の様子にも揺れることなく、朱莉は淡々と述べる。

そして美羽は朱莉の隠された視線を避けるかのように顔を逸らす。その顔には若干の嫌悪の色すら浮かび上がっていた。

「しかしまあ。強奪能力の持ち主<sup>アレンジ</sup>が現れた今、共感能力の可能性を持つ者の出現は喜ぶべきモノではないのでしょうか？」

「……… 何故また、そんなものが……」

「サアテ、それは知りませぬ。私も今日この日、私の“メ”で確認しただけでしてのう」

「まさか……、そんなはず」

「

と、そこまで言いかけたところで、ガシャリという音と共に美羽と朱莉が居る部屋へと何者かが入り込む。

当然二人はそちらへと視線を向ける。

その視線の先には朱莉と同じような白装束に身を包んだ少女がゆらりと立っていた、こちらも朱莉と同じように目を乱雑に白い目が描かれた黒帯で隠している。

黒帯の所為で朱莉と同じように残念な感じに仕上がってはいるが、その顔のパーツパーツはどれも美しく、やはり黒帯さえ取れば美しい顔なのだろう。

………だが、朱莉とは根本的に違い、この少女は全身から生氣といったものが感じられず、むしろその白く、美しく、ゆらゆらと小刻みに揺れる様は幽霊などに近い。

「………ただいま………」



雑多な音の中では簡単に消え去るかのような、か細い声でその少女は呟くように言葉を発する。

「おお、帰られたか処裡殿<sup>しより</sup>。今日は随分と早かったですね？」

そんな少女……処裡の言葉も朱莉は聞き逃さずに、極めて明るい調子で返す。

「……どいつもこいつも殺し甲斐のない……。……全部が全部、殺しと性行為しか頭がないクズだった……」

「……おお……それは残念でしたな……同情しますぞ」

「……ほんとうに残念……」

そういう少女が両手に持つ二本の刀はびっしりと血に濡れている。

それは少女の行ってきたことを全て何も言わずに証明していた。

「……で、何を慌てているの？ ……」

そんな処裡は、美羽を一瞥し、その様子を伺った後に朱莉へと問いながら部屋へと入り込んでくる。

「ああ、それがですなあ。これこれこういうことでして……」

その問いに対して朱莉は非常に手軽に、極めて簡略的………というか、逆転の発想で“これこれこういうことでして”と言うことで処裡に説明になってない説明をする。

処裡も処裡でそれを適当に流しながら聞きつつ、両手に持つその刀の刃にびっしりと付いた血を最寄の棚に置いてあった布で綺麗にふき取る。

「……うん、ぜんぜん分からないけど大体分かった……」

実際に《これこれこういうことでして》と言われて伝わるワケがないが、処裡は何かを感じ取ったらしく、納得したように何度も頷く。

「……本当に分かったんですか？」

だが、そのやり取りに不安を覚えたのか、美羽は不安げな表情で処裡へと問う。

その問いをされた瞬間、一瞬だけ処裡は苦虫を噛み潰したような表情をしたが、すぐに先程と同じような無表情になる。

「……実はドアの前で盗み聞きしてた……」

「ああ……、なるほど……」

さらりと答えた処裡。

それに対し、それでいいのか？ と内心美羽は思いつつも妙に納得する。

そして、納得したと同時に安堵感を覚えた美羽へと処裡は急に右手に持つ刀の先端を向ける。

美羽はその行為の意図が読めず、思わず顔を引きつらせる。

「……あと、逆坂美羽はこの程度の状況下では焦らない……」

「……え？ あ、そうですか。ハイ」

向けられた刃に美羽が思わず顔を引きつらせていると、処裡は脈絡のないことを言う。

それに対し美羽は、想像していた最悪のパターン全てから外れた

ことに拍子抜けして思わず頷いてしまう。

そして処裡は美羽の返答に満足したのか、一の字に閉じられたその口を僅かに吊り上げて一瞬笑顔とも取れる表情をする。

「……それと、私の知る逆坂美羽はイヤらしい笑みは浮かべない、元気で明るい子……」

「あ、はい……」

美羽が頷いたことを良しとしたのか、処裡は更に脈絡のないことを言い放つ。

そして、わけも分からず再び頷く美羽。

すれば処裡は段々と笑みを抑えきれなくなり、声も上り調子になる。

「……ついでもっと胸がある……」

「それは嘘です」

だが、三回目に美羽は首を横に振った。  
力強く横に振った。

「……嘘じゃないっ……」

そしてソレは良しとしなかったのか、処裡は先ほどまでとは違って感情をむき出しにした声で応える。

更にはその表情も酷くショックを受けたような……、それでいて突きつけられた現実から逃げ出したいとも言いたそうなモノへと変わる。

だが、そんな表情をしつつも処裡は美羽のことを親の仇のように睨み付ける。

そこには確実に殺意が存在し、普通の人間なら恐ろしくて自分の

言ったことを改めるだろう。

「いえ、嘘です」

しかし、美羽は一步も引き下がらず、むしろ詰め寄る。

そこには「これだけは認めない」という確固たる意思が存在した。

「……もつとある……、もつとあるもん……!!」

処裡も意地になってきたのか、訴えるように……というより、駄々をこねるように何度も同じ言葉を繰り返す。

その姿が美羽にとっては愉快だったのか、美羽は何処かしら勝ち誇るかのような笑みを浮かべている。

「いや、ない」

そして自らの勝利を宣言するかのような、相手が自分より格下だと嘲笑うような声色で即答した言葉。

処裡にとって、自分を馬鹿にするかのような言葉、……それを聞いた途端に処裡は全身を一瞬硬直させ、その後にぎぎぎ……といった擬音が似合いそうなほどゆっくりと美羽へと向けていた刃を下ろし。

「……斬捨て御免……」

直後に右手に持つ刀の刃を左手に持つ刀の刀身に乗せるような独特の構えを取る。

「する程の胸もないですよ……あつ、すみません……度胸の間違いでした」

ついには実力行使に出ようとした処裡に対し、すっかり調子に乗った美羽はケラケラと笑いながら挑発をする。

そこには恐怖の色など一切無い。あるのは「意地でも逆坂美羽の胸はこれ以上はない」という意思を貫き通す覚悟だけだった。

「……マジで殺す……」

そんな美羽の対応に遂にキレてしまい、所謂「屋上へ行こうぜ、久しぶりにキレちまったよ」状態へと化した処裡はゴゴゴゴ……と背後に鬼気たる何かを現しつつ、両手の刃ごと肩をわなわなと震わせて美羽へと近づいていく。

それに対し美羽は美羽で挑発的な笑みを浮かべる。

今にも殺し合いをし始めんという風の雰囲気だった。

……が、その間に朱莉がすいっと割り込み、互いを静止させる。

「お二人とも……見苦しいですぞ」

ヤレヤレ、と天を仰ぎながら呆れたような口調で話す朱莉。

そして、それを聞いた二人は思わず内心で『……普段は壁に向かって演説してるヤツに言われたくねえ……』と思いつつも互いに先程までの戦闘態勢を解き、大きく溜息を吐く。

「……まあいい、雲アレンジやら霧やら影やらを斬っても疲れるだけ……」

少女は若干トゲのある声でそう呟き、部屋から出ようとする。

「……何処へ？」

帰ってきたばかりなのに、再び何処に行くのか、と少々気になっ

た美羽は問う。

「……共感能力の形質があるとかいう女……、興味があるから少し遊んでやろうかと思って……それに、本当に共感能力なのだとしたら……」

処裡は一度美羽へと向き直り、ゆっくりと述べる。

「……<sup>断罪</sup>殺しておいたほうがいいじゃん……」

少女の声を聞いて、美羽と朱莉は「ああ、なるほど」と思い、頷く。

そして同時に「また死人が増えるな」とも思い、溜息を漏らすのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6915z/>

---

Arrange Line

2011年12月25日12時52分発行